ジェフリー・ハーフ著、中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳

『保守革命とモダニズム
——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治——』

本書は、Jeffrey Herf, *Reactionary Modernism: Technology, Culture and Politics in Weimar and the Third Reich* (Cambridge, 1984) の邦訳である。序文、日本語版への序文、九章にわたる本文、訳者あとがき、文献解題、人名索引という構成になっている。本書の説くところは明快である。第一章にあるように、検討の対象は、「啓蒙的理性を拒絶したドイツの思想家たちがその一方では近代的テクノロジーを受け入れていたという事実」であり、基本的な主張は、「ナチスによる権力掌握以前にも、またそれ以後にも、保守的イデオロギーの中で、のちにはナチ・イデオロギーの中で、重要な潮流をなしていたのは、ドイツ・ナショナリズムの中に存在している反近代主義、ロマン主義、非合理主義の思想と、手段—目的合理性の最も明白な現れである近代テクノロジーとを和解させようとする考え」、つまり本書のキー・タームである「反動的モダニズム」であったという点にある。「反動的モダニズム」は、よそよそしい西欧「文明」Zivilisation からテクノロジーを切り離して、ドイツ「文化」Kultur の陣営へと迎えたのである。こうしたテクノロジーと非理性とのドイツ的な和解は世紀転換期のドイツの工科大学で開始された。そしてワイマール時代の保守革命のなかで非技術系の知識人たちによって擁護されるようになり、一九二〇年代にナチ党のなかに、三〇年代にはヒトラー体制の宣伝担当者たちの間に安住の地を見いだす。そして一九四五年に至るまで全体主義イデオロギーの勝利に貢献する要因となったのである。

第二章以下においては、動機、意味、意図、象徴に焦点を合わせて反動的モダニズムのイデオローグたちが描かれて行く。かの『西洋の没落』のシュペングラー、「戦場体験」のエルンスト・ユンガー、『存在と時間』のハイデガー、カール・シュミット、ハンス・フライヤー、ヴェルナー・ゾンバルト、そして何人かのエンジニアたちと、登場人物は多士済済である。そして第八章においてナチ時代のドイツにおける政治とイデオロギーの優位の状況とそれがもたらした技術革新の阻害や目的合理性の貶価が説明される。

第九章は結論である。フランクフルト学派の批判理論家たちやエルンスト・ブロッホから著者が多くを学んでいることは序文や第一章にも記されているが、ここでもこれらの人々がハンナ・アーレントらと共に高く評価されている。『ビヒモス』の著者フランツ・ノイマンら正統的なマルクス主義者たちは結局ナチズムを資本主義の手先としか見ることができなかった。第一章にあるように、ダーレンドルフやシェーンボームたちはナチ・イデオロギーと近代テクノロジーとの和解を見抜くことができなかった。しかし批判理論家たちやそれに近い人々は「理性と神話の総合」に気づいていたのである。とはいえハーフは彼らに全面的に賛成はしない。『啓蒙の弁証法』においてホルクハイマーとアドルノはナチズムを全面的に啓蒙された世界のもたらす災いとして捉えた。つまり「アウシュヴィッツは近代世界全体のありうる運命を代表して

いる」のである。だがハーフの主張するのはあくまでドイツの特殊性である。「ドイツは、あまりにも多くの理性、あまりにも多くの自由主義、あまりにも多くの啓蒙思想のために苦しんだのではなく、それらのどれもが十分に存在しなかったために苦しんだのである。」かくなる状況を背景に登場した反動的モダニストたちはナチスの政権掌握後もイデオロギーの終焉の到来を妨げた。しかし彼らの提示した処方箋は劣悪であった。結局、「第二次産業革命によって生み出された挑戦は、テクノロジーと魂についての哲学的思弁によっては制御することができなかった」というのが、本書のしめくくりである。

以上簡単に本書の内容を紹介したが、少しばかり感想を述べておこう。なんといっても本書の意義はテクノロジーとナチ・イデオロギーの関係という、従来あまり明らかでなかったテーマを取り上げた点である。第七章「イデオローグとしてのエンジニア」や第八章「第三帝国における反動的モダニズム」は新鮮であり、第三章のシュペングラー解釈はユニークである。しかし疑問点もないわけではない。ハーフは反動的モダニストをあまりにも実際以上に大きな存在として見ているのではないかという感が強い。本書で取り上げられている人物を見ても、みな多かれ少なかれ当時のドイツ知識社会のなかで周辺部に位置する人々であった。おそらく周辺的ではないハイデガーが、反動的モダニストとは規定しがたいことは第五章で述べられている。最近待望の邦訳が出たF. K. Ringer, *The Decline of the German Mandarins: The German Academic Community 1890–1933*, Cambridge, Mass., 1969（F・K・リンガー著、西村稔訳『読書人の没落――世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』名古屋大学出版会、一九九一年）においては、一八九〇年以降の読書人を正統派と近代派の二つに分類しているが、反動的モダニストはそのいずれにも属さない存在であろう。本書がリンガーの当該書とあわせて読まれるべきだと考える所以である。

ともあれ本書が邦訳された意義は大きい。わが国のドイツ史研究が近年持つことのできた二つの大著（野田宣雄『教養市民層からナチズムへ――比較宗教社会史の試み』名古屋大学出版会、一九八八年、中村幹雄『ナチ党の思想と運動』名古屋大学出版会、一九九〇年）と共に、ナチズムにいたるドイツ思想界の研究の一層の進展に寄与するに違いない作品であるといえよう。

（四六版　四四三頁　索引・文献解題
二〇頁　一九九一年三月　岩波書店
四二〇〇円）

（野村耕一　京都大学文学部助手）